



2019年9月19日

中東経済シリーズ ～トルコ直接投資誘致モデルと中東諸国～

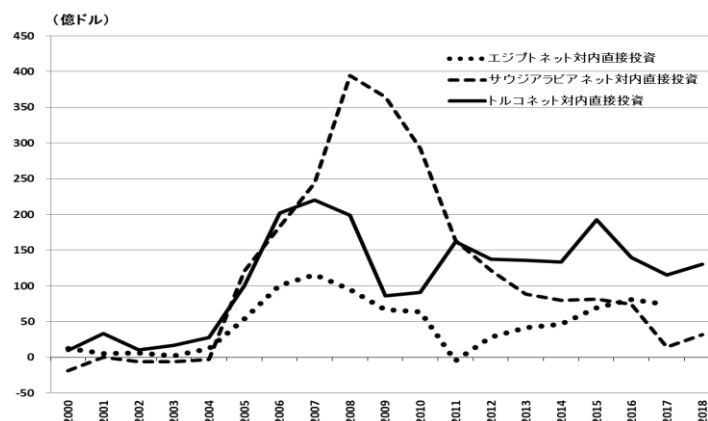
公益財団法人 国際通貨研究所
開発経済調査部 主任研究員 九門康之

中東諸国は経済成長の施策として、海外からの直接投資（FDI）を呼び込もうとしている。その代表例として、エジプト、サウジアラビアとトルコを比較する。

エジプトは、2016年以降のIMFとの経済再生プログラム実施過程で、海外からの投資誘致に力を入れている。サウジアラビアは豊かな天然資源に恵まれているが、自国民雇用拡大の観点より外国資本の進出に期待をよせる。これらの動きに先んじて、FDI誘致により国内産業の強化に成功した国がトルコである。中東北アフリカでFDIにより産業育成まで至った例は、トルコ、モロッコ等のみで例が少ない。しかしながら、スタートは平穏ではなかった。同国は2000年に金融危機に見舞われた。同年IMFのスタンバイ契約に調印し金融支援を受けた。外貨資金の調達を安定させるため、同国が取った施策が外資誘致の強化であった。

FDIを通じた資金流入は相対的に安定している。事業性の資金であるため長期にわたり滞留し、輸出・輸入の資金フローを生み出す。金利動向や地政学リスクに敏感に反応して出入りを繰り返す投機的な資金や、リスク・リターンを判断基準とする金融機関の融資と異なる点である。

図表1：エジプト、サウジアラビア、トルコへのFDI動向



(資料) IMF データより作成

<FDIの進展と目的の変化>

FDIは進展に従いその目的が変化する。エジプトは「外貨資金」に重点を置いている。カントリーリスクが相対的に高く、海外からの借入が簡単ではないため、豊富な労働力と大きな市場を背景として企業の生産拠点呼び込み、外貨の流入を目指している。他方、サウジアラビアは、資金よりも「産業育成」を通じた国内雇用機会の拡大と、技術の移転に主眼をおいている。ビジョン2030実現に向けたエンジンの一つがFDI誘致である。

トルコの場合、外貨調達安定化から出発し、輸出産業の育成という過程を経て、現在は付加価値の拡大と独自の技術開発という次の課題に挑戦している。

図表2：FDIの進展と目的の変化



<トルコモデル>

トルコのFDI戦略には2つの大きな柱がある。1つは上述の国内産業の育成である。2つ目は市場の開拓である。1963年のアンカラ協定以降、同国は欧州との接近を図ってきた。同国の輸出産業の発展は、欧州と地続きであるという地理的な利点と、相対的に安価な生産コストが理由と説明されるが、その背景には長年にわたる市場開拓の努力がある。

将来の動きとして、製品の輸出に留まらずFDIを基本としたトルコ型産業モデルが近隣諸国に移転した場合、どのような展開があるだろうか¹。近隣にはイラン、中央アジア等これからの発展が期待される国が多い。地域の人口は増加を続けており市場は拡大している。湾岸諸国や、サウジアラビアとは政治的イスラーム勢力への対応をめぐる関係がぎくしゃくしているが、カタールとは政治・経済・軍事で近い関係にあり第三国での協働が可能である。同国経済の中東地域における影響力は未知数である。しかしながら、「トルコモデル」が他国に拡大することで、地域経済のゲームチェンジャーとなる可能性がある。

以上

¹ 日本政府がイラクおよびアフリカ関連でトルコ・日本企業の協働を奨励している。トルコ企業の行動を活用するもので、結果としてトルコモデルの輸出につながる。